

Title	日本版刻術の進歩につき
Sub Title	
Author	幸田, 成友
Publisher	三田学会
Publication year	1911
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.5, No.2 (1911. 2) ,p.144(26)- 150(32)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19110215-0026">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19110215-0026</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 日本版刻術の進歩につき

幸田成友

(其一)

寶龜年間陀羅尼經を彫らせ給ひしより今日に至るまで日本の版刻術は多岐多様の發達を遂げたのであるが、其中最も廣く行はれ、又最も能く進歩したのは木版である。當初は直線的即ち正楷の漢字或は片假名の如きものに限られたが、其曲線的即ち草體の漢字平假名の類は勿論、曲線によつて重きを爲せる繪畫をも容易に示し得ることとなり、古くは一度刷即ち墨一版であつたものが、徳川氏の半頃より色刷を發明し、數枚の色板を使用して一枚の繪を完成するに至り、現今は一圖に百餘枚の版木を用ふるさへ取て珍しとせざるに至つた。活字は文祿征韓役の本邦文明に及せる一影響で、銅活字あり、木活字あり、前者は早く廢れ、後者は明治初年まで繼續し、又幕末西洋風の鉛活字の鑄造法傳はつてより、文字の印刷には殆んど木版

を驅逐した感がある。併し活版術が日本に於て或る特別の發達をしたとは言はれぬと思ふ。銅版は司馬江漢が和蘭の法に則つて始めたる後、差したる進歩もせず、石版が近年繪葉書の流行によつて稍進歩したなどは、大に口惜しい。其他網目版、三色版、亞鉛版、コロタイプ版、いづれも寫眞術の應用で、如何程最負目を以て論じて、歐米を凌駕するとはいへぬ。さすれば我に於て獨り誇り得るは木版彫刻である。近來科學上の圖には多く木口彫コグチガサ—從來の木版が縦に取つた櫻の板を用ふるに反し、柘植を横に切り、圖の大小に應じ、數箇を合せて用ふる—が行はれて居るが、幕末に出版になつた兵書例へば遠西武器圖略市川齊宮譯解 嘉永六年版の如きは、其緻密確實なる點に於て、決して木口彫に一步を譲らないのである。

前に申す通り、文祿以前の本邦の出版物は木版である。文祿以後と雖も、明治に至るまでは活字版の書物は整版—活字の一字一字組合せるに對し、一枚の版木を使用するをいふ—の書物に對し、到底比較にならない位少い。要するに書物と木版とは離れ難き因縁あり、木版彫刻術の進歩を研究するには、歴代出版の版本を見るより外に方法は無い。尤も版木その物が存在すれば、之にまさる事は無いが、版木は割

れる朽るといふ自然の災害の外に、焼ける削られるといふ人為的の故障がある。善い版木で表裏両面に彫つてあつても、版木一枚を摺つて僅に二葉を得るに過ぎぬ。版木五十枚で、僅に百丁の書一冊を得るのみ、近頃群書類從六百六十五冊の版木の置場に困却した話もある位で、賣れぬ本の版木を削つて別のものを彫ることは、從來盛に行はれた。されば今日古い版木の多數に現存してゐるのは奈良興福寺の北圓堂に積んである鎌倉足利時代の經文の版木位で、帝國博物館に陳列せられて居る正平版論語の版木も一部分に過ぎない。

近年亞米利加人及佛蘭西人の中に、浮世繪を賞美する人多く、邦人の之に關する著書の乏しきに反し、彼にはゴッフル、フェネロサ等の好著述がある。併し彼等は肉筆を好まずして版行繪を好む。其版行繪を好む所以は種々あらうが、要するに版行繪は畫家が文章を假らずに自己の技倆を思ふ儘に發揮せしめたい、換言すれば書物の挿畫を描いては著者の助手である、助手の位置より獨立して著者と對等の位置になりたいといふ念と、出版者及賞翫者が之に對する同情とより生じたものと見て宜しい。さすれば畫家が其版下に苦心せるは勿論、版木師の苦心も甚しく相

依り相助けて木版彫刻の粹を示すに至つたものだ。一枚摺又は三枚續の版行繪にせよ、版行繪の集合と見るべき繪本にせよ、木版彫刻術の進歩を研究するには、之も亦缺く可からざる資料である。

版本及版行繪によつて研究するとせば、ドレ丈の版本及版行繪が日本に出來て居るかを調ぶるのが、第一の手段である。而し不幸にも版行繪の目録は無い、其理由は主として版行繪其物が出版當時より近年に至るまで久しい間、今日の如く珍重されなからうが、目録の作り悪いのも一因であらう。廣重の東海道五十三次とか、歌麿の蟹の圖とかいへば、特殊のもので、誰にも解るが、歌麿筆筆人圖清倍筆歌妓圖といつても、どの圖を指すのやら、一向會得しかねる。之に反して書籍目録の方は時代時代の目録が多少今日傳はつて居る。但し其目録の不完全なるは言ふ迄も無いが、豈獨り目録のみならんや、實は書物其物が日本では概して愛重せられなかつたし、又愛重せられないのである。西洋の古本屋の目録を見れば Manuscripts は殆ど無い、支那の古本屋にも鈔本は極めて少ない。寫本が澤山あるのは日本ばかりであるが、寫本の餘計あるのはツマリ讀者の少い證據である。慶長以後京都大阪

並に江戸に多数の本屋はありながら、出版せられずに残つたは、畢竟出版しても購入者が少い、算盤の桁に合はぬといふのに過ぎない、出版未出版を以て其書の善悪良否を判ずるは大早計である、寛政重修諸家譜千餘卷は徳川幕府の選述で、史學上闕く可からざる寶典でありながら、出版は愚か副本の謄寫すら嘗て企てた者が無いと聞く、日本は一等國などと威張つても、文教の上に於ては二等か三等か、將又四等か、日本で大部の出版物といへば群書類従であるが、清の康熙年間銅活字を以て印刷せる古今圖書集成壹萬卷に比すれば、穴へでも入りたい位だ、尤も慶長の頃、家康盛に文學を奨励し、書籍を集め、或はこれを刊行し、朝廷にても競争的に數部の勅版を作られ、其後幕府諸侯は更なり一個人にて開版した書籍も多いが、支那に比しては殘念ながら遜色がある、支那は流石に古來文教を重じた國柄故、書籍出版を以て富豪紳士の當然爲さざる可からざる一事業としてあるやうだ、此美風は將來の日本にも是非流行らせたい、さて草双紙の奥によく、此ぬし何誰、此本何方へまゐり候とも、早々御返し被下度候と書いてあるは、借手に投遣の仕業があるのを心配した爲である、但し貸主といひ借主といひ草双紙を翫ぶは、いづれ婦子供故、さして

答むるに足らぬとしても、伴信友の藏書印に同様の文句あるに至つては驚かざるを得ぬ、其藏書印は上部に伴氏の紋所あり、其下に若狹酒井家人伴氏藏本と二行に認め、更に其左右に、コノフミヲカリテミムヒトアラムニハ、ヨミハテ、トクカヘシタマヘヤとある、信友といへば有數の學者で、之と書籍を貸借する位な人々は、皆相應の人であつたらうに、其藏書印に斯様な文句のある所を以て見れば、本を借りたまゝで返さぬ人もあつたか、或は實際あらぬにせよ、あるだらうといふ心配が所藏者の胸裡に存したものと云へる、書物は雨傘や風呂敷と同一ではない、我家の書物が何時か他家へ行き、他家のものが知らない間に我家にあるやうでは、甚だ不都合の事柄である。

本屋といふ營業は何時から始まつたか、確然とは知れぬが、慶長十四年出版の古文眞寶の奥書に、室町通近衛町本屋新七刊行とあるのが一番古いと思はれる、さうして其以前は皆特志者の出版で、寺社に奉納するか同志者に頒つを目的とし、經文佛書の類には、先祖先師の菩提の爲とか、今生の罪障消滅の爲とか、明に願主の姓名と開版の次第を記したものが多く、中には助力者の氏名や、時としては其金額を記し

たのもある、貞應三年版の佛母大孔雀明王經の如く、奥書に、願主權僧正法師大和尙位覺教、經生阿闍梨大法師禪海、彫手大法師實永といふ風に、開版人版下の筆者及彫工の名を連記せるは稀有の例で、又實永頃の活字本に、植工某と活字を植ゑた人の名のあるのも珍しい、徳川時代になつて、書林の出版物には發兌人の名を擧ぐるを例とし、後には江戸京都大阪三府の書林の名を連記してあるが、之は其中の或者が出版人で、他は取次人の意味でもあらうし、又實際大部のものになると、數人合資で版木を作り、銘々若干枚を所有し、印刷の場合に其版木の數に應じて相當の板賃を收めたといふ事である。

淮海外集 二卷

通川花路分助鑲刊行

時寶永七庚寅下秋

植工常信

朝鮮に於ける我商業の前途

星野 勉 三

朝鮮に於ける我商業は未だ農業の如く重要なる地位を占むるに至らずと雖も、其研究は頗る興味ある事にして、或は其之に従事する者の中に不正の輩多きが爲めに其の前途を悲觀する者あり、又は我商業は所謂共食トモヅヒに過ぎずとて其反省を促す者ある等の事情を顧れば、朝鮮に於ける我商業の前途に就て一言するは亦徒勞に非ざる可きを信ずるなり。

抑も朝鮮に於ける我商人の貿易上の勢力如何と云ふと、之は戦後順調に發達し來たりて未だ特に辯明を要するが如き問題あるを見ず、然れども今議論の順序として其大勢を略説せんに、其輸出入共に我商人の獨占と云ふも過言に非ざるの形勢にして、統監府發行の韓國施政年報等に依りて最近十年間の計算を見るに實に左の如き喜ぶ可き現象を呈しつゝあるなり。